

01	名古屋	大曽根中学校	カトウ ナオト 氏名 加 藤 直 人
分科会番号	1 2	分科会名	自治的諸活動と生活指導(中学校)

研究題目 自分なりに仲間とのより良い関係づくりにチャレンジできる生徒の育成

研究要項

1 生徒の実態

私は、他者と関わるスキルを磨き、自分なりに仲間とのより良い関係づくりにチャレンジできる生徒を育成したい。チャレンジできる生徒とは、失敗への恐れを乗り越え、自分に合ったペースで他者との関わりにおいて「あと一歩」を踏み出すことができる生徒であると考えます。

本学級の生徒の多くは、休み時間に黙々と勉強に取り組んだり、テストの難問に果敢に挑んだり、一見主体的に学校生活を送ることができている。しかし、対人関係においては「どう思われるか怖い」と口を閉ざし、「失敗して恥をかくより、賢く黙る」ことを選ぶため、クラスに揉め事はないものの人間関係における成長機会が損なわれている様子が見られる。これは、本学級の WEBQU の結果において「配慮」のスキルが極めて高い一方で「かかわり」が平均的であることから裏付けられ、生徒が「より良い関係づくり」のためではなく、「対立リスクから自分を守るため」に配慮を使っていることが原因の1つであると考えた。

そこで、自己分析からスモールステップの行動目標を設定し実行する「あと一歩チャレンジ」と、挑戦した経験を言語化し次へ繋げる「振り返り」のサイクルを通して、自分なりに仲間とのより良い関係づくりにチャレンジできる生徒の育成を図りたいと考えた。

2 実践の方法

- (1) 対象 1年6組 32名(男子15名、女子17名)
- (2) 実践の流れ

仲間とのよりよい関係づくりを目指し、実践Ⅰ～Ⅲを一つのサイクルとして繰り返し実施した。生徒は、このサイクルをWEEK 1～9の期間に何度も回しながら、「あと一歩」の行動に挑戦する経験を積み重ねていく。なお、WEEK 1～5は個人の成長に焦点を当て、WEEK 6～9は集団のために動く力(リードする行動)に焦点を当てる期間として位置付けた。

実践Ⅰ (課題の把握)

WEBQUの結果やこれまでの行動の振り返りを基に、自身の他者との関わり方を見つめ直し、課題を把握する。

実践Ⅱ (あと一歩チャレンジ)

自己分析を基に、「あと一歩チャレンジ」としてスモールステップの行動目標(アクションプラン)を設定し、実際の生活の中で実行する。

実践Ⅲ (振り返りと学びの蓄積)

ワークシートへの記入や教師との対話を通して挑戦した経験を振り返り、その過程や成果を言語化する。成功も失敗も「学び」として捉え、次の「あと一歩」へとつなげる。

このように、生徒は「課題の把握→挑戦→振り返り」のサイクルを繰り返しながら、よりよい人間関係づくりや集団づくりに主体的に取り組んでいった。

3 実践の経過

WEEK 1～3 個人の成長に向けた一歩

(1) ねらい

個人の対人関係における課題を把握し、無理のないスモールステップで他者と関わるための目標を立て実行する。

(2) 実践の方法

自身の課題を踏まえてアクションプランを設定させ（実践Ⅰ・Ⅱ）、その結果を毎週末にワークシートで振り返らせる。また、個別の教育相談を通して、取り組み全体を振り返る（実践Ⅲ）。

(3) 留意点

① 生徒が自分に合ったペースで踏み出せるよう、教師は先回りせず伴走する。

② 評価は一方的に行わず、生徒自身の言葉で成長を語らせる。

(4) 活動の様子

○ 生徒の姿（実践Ⅰ・Ⅱ）

転入生で、友達ができるかなと不安な生徒Aは、「1日1回自分から話しかける」目標を立てた。WEEK1は挨拶から始め、WEEK2では「ポケモンの話」で盛り上がることに成功した。WEEK3では遊びに誘うことはできなかったが、会話は途切れさせず関係を保った。

○ 教師の支援（実践Ⅲ）

挨拶ができたという報告に、教師は「ナイスチャレンジ!」と称え、「共通の話題があると話しやすいね!」と価値づけを行い、段階的なステップアップを後押しした。さらに、後日行われた教育相談において、教師が「今回の『あと一歩チャレンジ』に取り組んでみてどうだった?」と問いかけると、生徒Aは「目標に対しプランを立てて振り返りを繰り返したおかげで『関わり』を意識できました。自分から深く関われました」と自らの成長を語った。それに対し、教師は「無意識を『意識』に変えた成果だね。その感覚、これからも大事にしてほしいな」と返し、一連のプロセスで得た感覚を定着させる対話を行った。

(5) まとめ

自分なりの目標に向かって行動を起こすことで、単なる挨拶から関係を深めるための「会話」へと着実に一歩を踏み出すことができた。また、事後の対話を通して無意識だった課題を意識的な行動へと変えたことを自覚させ、確かな手応えと自信を深めさせることができた。

WEEK 4～5 相手の心を想う一歩

(1) ねらい

自分の言葉や行動を工夫することで、相手の気持ちを考えて関わるスキルを身につける。

(2) 実践の方法

スポーツフェスティバルのリレー練習など、集団活動で生じる対人関係の葛藤を乗り越えるためのアクションプランを設定し、実行する。

(3) 留意点

意欲に差がある仲間に対して、怒るのではなく、相手を前向きにさせるアプローチを自ら考えさせる。

(4) 活動の様子

○ 生徒の姿（実践Ⅰ・Ⅱ）

リレー練習に意欲的に取り組まない生徒Dに対し、生徒Cは「相手の気持ちを考えて関わる」

ことを目標とした。怒るのではなく、「スタートの瞬発力すごいね！私が合わせるから一番走りやすいタイミングを教えて」とプライドをくすぐる言葉をかけ、生徒Dの意欲を引き出した。

○ 教師の支援（実践Ⅲ）

振り返りシートに対し、教師は「相手がやる気になる言葉づかいに感動しました！ナイスチャレンジ！」とコメントを記述し、相手の心を動かし、生徒Cの大人びたアプローチを強く価値づけした。

(5) まとめ

相手を変えようとするのではなく、自分の言葉を変えることで相手の心を動かし、メンバー内の空気を柔らかくすることができた。

WEEK 6 **チームになる一歩**

(1) ねらい

視点を「個人」から「集団」へ広げ、クラスのため、みんなのために動ける力（リードする行動）を育成する。

(2) 実践の方法

8の字跳びの練習に向け、「関わるスキル作戦会議」を開き、集団としての目標と個人のアクションプランを設定させる。

(3) 留意点

失敗を責めず、ネガティブな言葉を使わずに互いを励ます温かい空気づくりを意識させる。

(4) 活動の様子

○ 教師の支援（導入）

練習が停滞する中、教師自ら「雰囲気よく跳ぶために、クラスのためにどんな関わり方ができるかな？」と問いかけ、生徒が目標と向き合う場を設定した。

○ 生徒の姿（実践Ⅰ・Ⅱ）

生徒たちは目標 185 回に対し、「大きな声で数える」「ネガティブなことは言わず一言声をかける」とアクションプランを設定した。本番の記録は 140 回であったが、生徒Cが自ら「大きな声で数を数える！」と宣言して空気を変え、ミスにも温かい声が飛ぶようになった。

○ 教師の支援（実践Ⅲ・振り返り）

「練習のときは何となく取り組んでいたけど、みんなで声をかけ合うことで、より楽しくみんなと8の字跳びができました！」という生徒の振り返りを通し、自らの行動が集団の熱を生んだという手応えを実感できるよう見守った。

(5) まとめ

個人が他者へベクトルを向けた行動を起こしたことで、自らの行動が集団の熱を生む手応えを実感し、互いを高め合うチームへと変化し始めた。

WEEK 7～9 **緊張を笑顔に変える一歩（音楽会を通じた実践）**

(1) ねらい

「リードする行動」という抽象的な課題を音楽会という具体的な学校行事の目標に落とし込み、練習の場面や緊張する場面において仲間の不安な心に寄り添い、笑顔を引き出す「リードする行動」を実践する。

(2) 実践の方法

パートリーダーたちとの作戦会議を通じて、結果を目指す「成果目標」と自分たちで達成可能な

「行動目標」を分けて設定させる。その後、音楽会の練習や本番を通して、設定した行動目標を実行し、振り返りを行う。

(3) 留意点

結果（成果）だけでなく、自分たちで 100%コントロールできるプロセス（行動）に焦点を当てさせる。また、大きな声で指示することだけがリーダーではなく、弱さの共有や温かい声かけも重要であると価値づける。

(4) 活動の様子

○ 生徒の姿（実践Ⅰ・Ⅱ）

リーダー達は作戦会議の末、成果目標を「金賞をとる!」、行動目標を「全力で楽しむ! メリハリをつける!」と設定した。さらに、ソプラノリーダーの生徒 E は「声をかけあって、まとまった雰囲気にする」ことを個人の目標とした。WEEK 7 ではうまく声がかけられず足踏みしたが、本番直前に隣の仲間に「緊張するね」「がんばろう」と震える声でつぶやいた。この弱さの共有が安心感を生み、笑顔が広がった。

○ 教師の支援（実践Ⅲ）

目標設定時、教師は「金賞は相手があること。だけど行動目標は君たちの意志で 100 点にできる。ここだけは必ず達成しよう」と助言し、自分たちでコントロールできる目標に向かえるよう視点を整理した。また、焦る生徒 E に対し、WEEK 7 で「練習で上手に歌えていたら OK! と伝えてみよう」と具体的なアドバイスを送り伴走した。本番での成功体験後、「他の場面でも、もっと声をかけていきたい」と記した生徒 E に、「本番前に、みんな嬉しい気持ちになれるたね!」と書き添え、弱さの共有もよいリーダーシップであるからできることと称賛した。

(5) まとめ

生徒自身が納得して取り組める具体的な目標が定まったことで、実践への意欲が高まった。生徒はリーダーとしての重圧を乗り越え、自分らしい関わり方で行動目標を達成し、クラスに温かい対話の空気を広げることができた。

4 実践のまとめ

「課題の把握→挑戦→振り返り」のサイクルを繰り返し行い、生徒一人一人が自分なりの「あと一步」に挑戦できるよう支援してきた。その結果、生徒たちは、失敗を恐れて関わりを避ける姿から、自分なりの方法で仲間とのより良い関係づくりに挑戦する姿へ、さらに集団のために自ら行動する姿へと成長した。また、対立や失敗を避けるための「かかわり」から、互いの思いや意見を生かしながら関係や集団をよりよくしようとする主体的な「かかわり」へと変容していった。特に、3 年生を送る会の実行委員会では、相手の意見を受け止めながら建設的に話し合い、自分の考えを積極的に伝える姿が見られた。このことから、「あと一步チャレンジ」を通して積み重ねてきた経験が、行事の場面にとどまらず、日常の学校生活や自治的な活動へと広がり始めていることがうかがえた。

一方で今後の課題として、教師自身の「日常の対話」の質をさらに高めていく必要がある。成功や失敗を評価するだけでなく、「なぜその行動ができたのか」「その経験から何を学んだのか」を共に振り返り、生徒自身が成長を自覚できる対話を積み重ねていきたい。これからも生徒の勇気ある「あと一步」を見逃さず、私自身も生徒理解を深める対話への「あと一步」に挑戦していきたい。